

地域資源を生かした豊かな生活文化の創造をめざして 2 - 山口における地域プロデュースのための商品開発研究 -

共同研究プロジェクトリーダー：水谷由美子*

プロジェクトメンバー：井生文隆* 田村洋** 松尾量子*** 小南英昭**

山口光*** 小橋圭介****

キーワード：山口 ラップランド 地域資源 国際文化交流 産学共同研究 地域プロデュース
商品開発 展覧会 エコロジー サステイナブル ヒーリング ファッションデザイン
プロダクトデザイン フィンランドデザイン デニム 柳井縞 萩ガラス

はじめに

本論は2012年3月9日～11日まで実施された展覧会「Ecology・Sustainable+Healing Exhibition - フィンランドと山口の地域資源を用いた商品開発 -」について記述するものである。この展覧会は2009年度～2011年度にかけて山口県立大学国際文化学部文化創造学科企画プロデュース系教員スタッフとラップランド大学デザイン学部クロージング&テキスタイル学科教員スタッフの間で実施された国際共同研究「地域資源を生かした豊かな生活文化の創造をめざして - ラップランド大学と山口における地域プロデュースの実践的研究 - ^(注1)」の最終的なまとめとして開催されたものである。

本事業に関して当初2年間は山口県立大学国際文化学部国際共同研究事業および山口県立大学研究助成事業の支援を受けて実施され、2012年度は前者の支援により行われたものである。

地域プロデュースをめざした研究創作の実施に当たり、素材や加工などの点で地域の企業や団体との協働作業が行われた。そこで、今回の展覧会実施に関しては場所の提供、空間演出やデザインなどにおいても地域のデパートやデザイナーおよび企業の協力を得て、協働作業として実施された。

以下には展覧会開催に関する企画・運営および作品について報告する。それぞれの作品については各プロジェクトメンバーがコンセプトを記し、全体はプロジェクトリーダー水谷が記述する。

1 展覧会「Ecology・Sustainable+Healing Exhibition - フィンランドと山口の地域資源を用いた商品開発 -」の概要

展覧会「Ecology・Sustainable+Healing Exhibition - フィンランドと山口の地域資源を用いた商品開発 -」は、2012年3月9日～11日に山口井筒屋5階催場にて実施された。

山口県立大学国際文化学部では、2009年～2011年にかけて3年間、双方の地域プロデュースを目指しながら、ラップランド大学デザイン学部と「Ecology・Sustainable+Healing」をテーマに共同研究を実施してきた。そこでは現代社会におけるエコロジーを前提とした持続可能で心身の癒しをも体験できる生活スタイルおよびそれを実現するための生活道具や衣服などについて、地域資源である柳井縞やデニムそして萩ガラスを主な素材テーマに、また伝統文化の折る・畳むなどを造形テーマにして開発した。

今回は山口県立大学側の教員による地域企業との共同商品開発をした成果を発表するものである。

この企画のスタッフは上記のように企画プロデュース系のメンバーである井生文隆、田村洋、小南英昭、

*山口県立大学国際文化学部・大学院国際文化学研究科教授

**山口県立大学国際文化学部教授

***山口県立大学国際文化学部准教授

****山口県立大学国際文化学部講師

松尾量子、山口光、小橋圭介そして水谷由美子の7名である。展覧会実施および商品開発のための制作などに関しては、ファッション関係では合同会社匠山泊、有限会社ナルナセバおよび柳井縞の会に協力を得た。また、家具についてはLB FURNITURE WORKS、ガラスに関しては萩ガラス工房有限会社、スチール造形は有限会社新興製作所に、そして展覧会場の空間デザインや設営に関してはD.N.A.INC.の小田浩昭をチーフとして株式会社やの舞台美術の矢野節およびLB FURNITURE WORKSの平川和明と溝内健吾など地域で活躍するデザイナーとの協働制作が実現した。なお、有限会社清水銘木店の協力を得た。

今回のテーマが「Ecology・Sustainable+Healing Exhibition」であることから、環境問題への配慮、癒しを感じさせる空間デザイン、そして田村洋の環境音楽デザインなど総合的な要素を融合させて全体の企画を立てた。企画・プロデュースは水谷が担当した。



写真1 会場でのオープニングセレモニー 左から岩野雅子（国際文化学部長）江里健輔（学長・理事長）入江壮行（山口井筒屋社長）水谷由美子（プロジェクトリーダー）



写真2 会場入口風景

2 展覧会の内容

(1) スケジュール

企画段階でスペースを借りる際のスケジュールについて山口井筒屋に相談したところ、山口井筒屋が「日本の『絆』写真展 - 東日本大震災から1年 連携による復興の軌跡 -」を企画中ということであった。そこで、当研究グループの商品は有限会社ナルナセバのプロデュースで販売されるために、その売り上げの一部を寄付することにして、同時期開催とした。また、山口県立大学国際文化学部+社会福祉学部が山口井筒屋とともに主催して、上述の写真展が開催されるように企画した。従って2012年3月9日(金)~11日(日)を会期として実施した。時間は金曜日は店舗が開いている10時~18時30分、土曜日は同理由で10時~19時そして最終日の日曜日は搬出の関係で10時~17時とした。

(2) 会場

会場は山口井筒屋5階催場を山口井筒屋(山口市)の好意で借りることができた。

(3) スタッフ

以下に記録としてスタッフのリストを記述する。

企画・プロデュース：水谷由美子(山口県立大学国際文化学部・大学院国際文化学研究科教授)

空間演出デザイン：小田浩昭(D.N.A.INC.)

装置デザイン：矢野節(株式会社やの舞台美術代表取締役)

平川和明・溝内健吾(LB FURNITURE WORKS)

清水勝(有限会社清水銘木店専務取締役)

グラフィックデザイン：小南英昭(山口県立大学国際文化学部教授) 小橋圭介(山口県立大学国際文化学部講師)

ショップ部門プロデュース：岡部隆則(有限会社ナルナセバ代表取締役)

展覧会場スタッフ：浅田陽子 松原直子 武永佳奈(山口県立大学大学院国際文化学研究科学生)

杉山優貴 石川智香子 栗田光二 原田真衣 皆川未都(山口県立大学文化創造学科企画プロデュース系学生)

※展示作品の一部は、有限会社ナルナセバのプロデュースの元、製造・プロデュースに関わった企業から販売された。その収益の一部は東日本大震災復興に寄付された。

3 作品解説

以下ではまずそれぞれが商品開発した作品、ダイレクトメール、空間演出などについてプログラムに基づいて紹介する。

(1) 井生文隆 デザイン(山口県立大学国際文化学部文化創造学科教授)(写真3)

テーブルとスツール"Patin and timeless designシリーズ"(写真4)

今世紀の社会は、「人」と「モノ」と「環境」が調和し、価値の向上と持続性を実現した「物語を語るデザイン」が求められている。流行や時代にとらわれることなく新鮮な魅力を持つデザインは、モノを通して様々な物語が生まれる。そのことで、モノへの思いが深まり、使うほどに心に馴染み、麗しくまた愛おしくなり、永く愛用されて環境に対する優しさにつながる。展示作品は、山口県の資源を素材としている。萩の竹積層成形合板、県木であるアカマツ材、柳井縞、デニムによるデザイン製品の開発を展開した。仕上げは、大内塗、田布施町の蠟燭(はぜろう)などで処理している。素材ごとに様々な物語を有していることと、環境や自然を意識させるデザインであるため、使い込むことで愛着がわき、価値が向上していくと考えている。地域活性化や環境問題への貢献、新しい文化の創出など、日本の豊かな暮らしの実現に寄与することができるかと信じている。

協力：LB FURNITURE WORKS 財団法人周南地域地場産業振興センター

山口阿東森林組合 有限会社ナルナセバ 柳井縞の会

九州造形短期大学造形芸術学科助教中谷昭子 TAKE Create Hagi 株式会社



写真3 中央 井生文隆
左 岡部泰民（合同会社匠山泊代表）
右 岡部隆則（有限会社ナルナセバ代表取締役）

写真4 ↓井生文隆デザインのテーブルとスツール
デザイン：井生文隆
プロダクト：LB FURNITURE WORKS・有限会社ナルナセバ



写真5 山口光



写真6 萩ガラス・カリン デザイン：山口光 プロダクト：萩ガラス工房有限会社

(2) 山口光 デザイン (山口県立大学国際文化学部文化創造学科准教授) (写真5)

1) 萩ガラス・カリン (写真6)

純国産(日本産)のガラスを使った、お酒とお茶の器を制作した。ラップランド大学との共同研究に際して、まずは社交の際に必要な「ドリンクを飲む器」をデザインした。ヨーロッパの方々にも日本酒やお茶を楽しんで貰えるように考えた器である。特に酒器に関しては、香りも楽しめて持ちやすい形にした。もちろん、日本の方にも楽しんで頂ける。

製造元である萩ガラス工房有限会社(山口県萩市)では、その材料を地元「笠山」で採掘される石英玄武岩から精製している。国内に流通しているガラス原料の大半は輸入なので、今回の商品開発は非常に珍しい純国産のガラス製品だと言えるだろう。今回は既製品の5倍以上は硬いというカリガラスを使って製造された。

協力: 萩ガラス工房有限会社

2) TETSU-ORIGAMI (てつおりがみ) (写真7)

TETSU-ORIGAMI (てつおりがみ) は「タレパン」と呼ばれる金属加工の技術から生まれた工作材料である。インテリアや室内装飾等のほか、本格的な機械・電子工作にも使うことができる。

「折り紙」は世界に誇れる日本の文化だと思う。ラップランド大学との共同研究に際して、和の文化を考え直す意味から「現代的な材料で新たな折り紙を創ろう」と考えた。様々な素材を探す中で山口県下関市の造船関連産業と出会い、この加工方法に行き着いた。不思議な曲げ具合だと思う。是非とも未知の触感を楽しんでほしい。

協力: 有限会社新興製作所



写真7 TETSU-ORIGAMI (てつおりがみ) デザイン: 山口 光 プロダクト: 有限会社新興製作所

(3) 松尾量子 デザイン制作 (山口県立大学国際文化学部文化創造学科准教授) (写真8)

デニム×柳井縞 Shima

山口県の伝統木綿織物である柳井縞は、「柳井縞の会」によって伝統を守りながら生産されている。糸の染色にこだわり、手織りによって一反、一反丁寧に織り上げられた反物は、藍や自然の恵みによる色調と軽くてあたたかな風合いを持っている。

今回、柳井縞を日常生活に自然な形で取り入れることを目的として、デニムと組み合わせた名刺入れやブックカバー、キーホルダー、トートバッグ等の生活小物の提案を行った。一つの縞が経方向と緯方向とで異なる表情を見せることに魅かれ、手織りの柳井縞をできるだけ無駄を出さないように使用するために小さな長方形に切り取りデニムと組み合わせた。伝統的な木綿織物としての柳井縞の小さな布片が、デニムと組み合わせられることによって、新しい魅力を発信してくれることを意図している。

協力：柳井縞の会



写真8 松尾量子

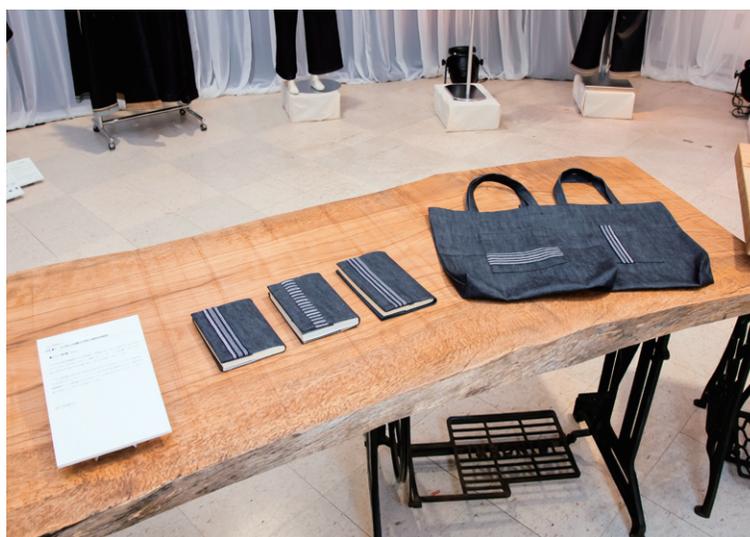


写真9 ブックカバーとトートバッグ デザイン・製作：松尾量子

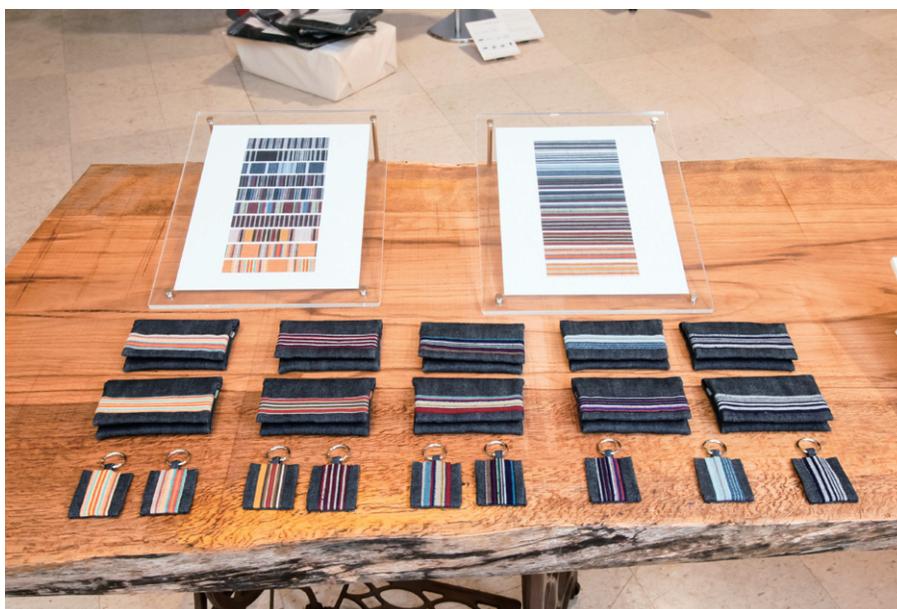


写真10 名刺入れ キーホルダー デザイン・製作：松尾量子

(4) 水谷由美子 デザイン (山口県立大学国際文化学部文化創造学科教授) (写真17右)



写真11 水谷由美子の作品コーナー全景 手前は柳井縞の反物



写真12 ジャケット「アポセオシス1」とタイパンツ
デザイン:水谷由美子 プロダクト:匠山泊
プロデュース:ナルナセバ

1) ジャケット「アポセオシス」(写真11・12・13・14・15)

マルヤッタ・ヘイッキラ=ラストス教授とともにラップランド大学で行った2011年度のワークショップのテーマは‘Apotheosis between body and clothing’つまり身体と衣服の間にある究極の形を追求するものだった。

1枚の布だけでジャケットが成り立つデニム生地の性質を生かしたシンプルなジャケットや縞柳井縞ジャケットさらにショール風の襟付きジャケットなどをデザインした。ヘムラインにはラップランドのトナカイの皮革なども使用している。



写真13 ジャケット「アポセオシス2」
デザイン：水谷由美子 プロダクト：匠山泊
プロデュース：ナルナセバ



写真14 ジャケット「アポセオシス3」
デザイン：水谷由美子 プロダクト：匠山泊
プロデュース：ナルナセバ



写真15 ジャケット「アポセオシス4」
デザイン：水谷由美子 プロダクト：匠山泊
プロデュース：ナルナセバ

2) 「タイ・デニムパンツ+柳井縞」(写真16)

山口県立大学国際文化学部国際共同研究の一環で、フィンランド国立ラップランド大学デザイン学部との共同研究を2009年から2011年まで実施し、山口の地域資源であるデニムと柳井縞(柳井縞の会によって復興された)を用いたワークショップを実施してきた。その成果の一つとして商品開発したものがこの「タイ・デニムパンツ+柳井縞」である。

形式はタイパンツにヒントを得ている。一般にジーンズは体にフィットするものが多く、体を締め付ける。また前立てがあり、男性服の作りとなっている。そこで、ゆったりとして前立てがなく、女性的なシルエットのパンツを考えた。タイパンツはウエストの調整をするために紐を付ける。この紐の裏に柳井縞を使っている。草木染めで手織りされた柳井縞が、一着ずつに個性を出している。好きな柄を選んでもらい、着装者のそれぞれの一着にして日常生活で愛用されることを願っている。



写真16 商品化されたタイパンツ デザイン：水谷由美子 柳井縞：石田忠男 プロダクト：匠山泊
プロデュース：有限会社ナルナセバ

▲デニム「合同会社匠山泊」「有限会社ナルナセバ」(写真3)

山口発の純国産デニム・プロダクト・ブランド「匠山泊」と山口県立大学発ベンチャー企業「有限会社ナルナセバ」の協力のもとで、以上のジャケットとパンツは製造された。デニムファッションを通じて、ラップランドとの交流をさらに深めていく。

▲柳井縞「柳井縞の会」(写真17左)

柳井市の伝統的な染織文化であった柳井縞は、機械化や着物文化衰退などが要因で大正時代には消滅してしまった。1993年に織り機が偶然に発見されたことから、地域の人々によって再興された。現在、柳井縞の会(会長石田忠男)によって伝統が守られながらも新しい表現も目指されている。

柳井縞の色調は伝統的には藍を基調として、比較的地味な印象を与えるものだった。しかし現在では地域に咲くさまざまな植物や木が使用され糸から染色されており、本学との共同研究を通じて若者にも受け入れられるような比較的明るくモダンな色調の反物や帯地も作られるようになっていく。手織りによる昔からのやわらかな風合いが、やさしい着心地を生み出しているのも特徴である。

協力：合同会社匠山泊 有限会社ナルナセバ NPO法人にっぽning協会

山口日本フィンランド協会 柳井縞の会



写真17 左 石田忠男（柳井縞の会会長） 右 水谷由美子

(5) 小橋圭介 デザイン（山口県立大学国際文化学部文化創造学科講師）（写真18）

小南英昭 監 修（山口県立大学国際文化学部文化創造学科教授）（写真19・20）

展覧会のDMおよび会場サインなどのグラフィックデザイン

テーマである「Ecology・Sustainable+Healing」の「・」は日本の日の丸、「+」はフィンランドの十字と
いうように、国旗のシンボルを取り入れ、両国の共生を視覚的に伝わるよう意識した。

また、タイトルに用いられている3つの単語は個々にあるものではなく、互いに関連していることを文字
組みで表現している。積み木のような柔らかく雰囲気のあるフォントと色を選び、フィンランドの風土や展
覧会の雰囲気を伝えられるよう心がけた。



写真18 左 小橋圭介 右 柳井縞の会 藤坂事務局長

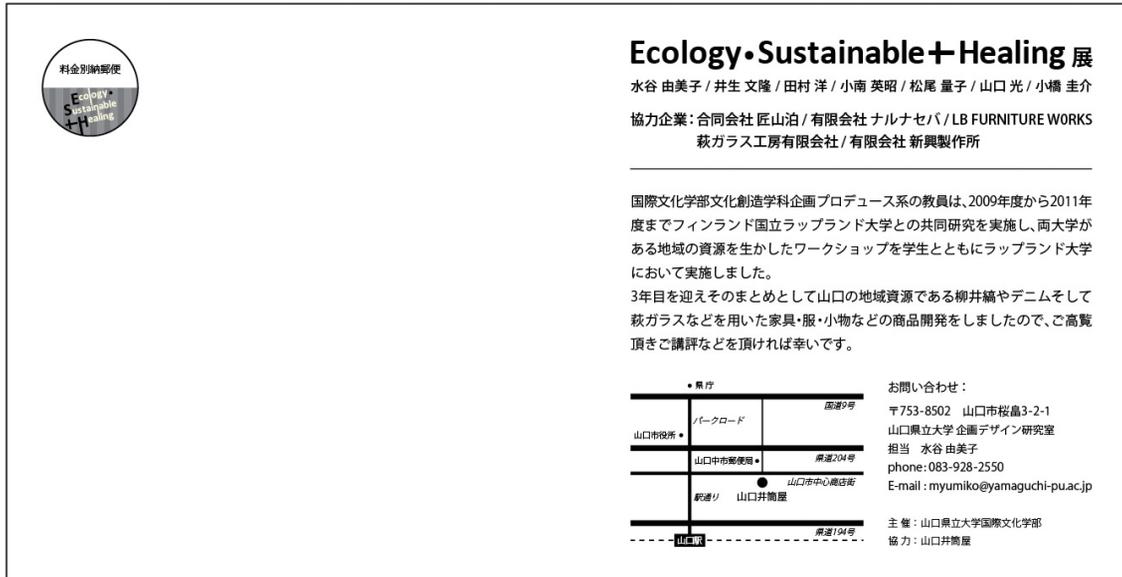


写真19 展覧会のDM表面 デザイン:小橋圭介 監修:小南英昭



写真20 展覧会のDM 裏面 デザイン:小橋圭介 監修:小南英昭



写真21 田村 洋

(6) 田村 洋 サウンドデザイン(山口県立大学国際文化学部文化創造学科教授) (写真21)

フィンランド民謡「野いちご」によるヒーリングミュージック (9分30秒)

豊かな自然と北欧文化が生み出す独特の文化が色濃く受け継がれたフィンランド民謡「野いちご」からヒーリングミュージックのために創作した静けさと神秘をテーマにした変奏曲である。

「野いちご」変奏曲では、「カンテレ」の音色を意識し、次々と変奏曲として展開したもの。

フィンランド伝統音楽で代表的楽器はカンテレである。日本の琴のようで5本弦~39弦まで様々あり、5本弦のカンテレの大きさは大正琴ぐらいで横にして膝の上に乗せて演奏する。その音色はどこか哀愁を漂わせ日本人も大好きな音である。音楽的にも楽器にしても隣国ロシアの影響をフィンランド伝統音楽は色濃く受けている。

フィンランドの紹介に必ず登場する「森と湖の国フィンランド。オーロラ、サンタクロース村にムーミン」とは別に、現代フィンランド音楽はロック音楽あり、世界的有名なジャズバンドがある。教育機関にはシベリウス音楽院があり世界をリードする多彩な音楽文化の国である。豊かな自然と北欧文化が生み出す独特の文化が色濃く受け継がれ、カンテレの響きのような今も静けさと神秘の国である。

4. 空間演出について

今回の展示会は、デパートの催場という無機質な空間にエコロジー、サステイナブルそしてヒーリングというテーマをどのように空間演出するかが課題であった。当初は段ボールで空間を作るというアイデアをもっていたが、極めて大きく天井も高い空間にブースのように表現するためには、段ボールを大量に発注する必要があった。

展示会終了後にこの材料がどうなるかということ議論したら、やはりその物量からエコにはならないということになり、さらに検討をした。今回は共同研究のメンバー以外に、地域で活動するD.N.A.INC.の小田浩昭(写真26)に相談した。

その結果、やの舞台美術の矢野節(写真27)などの意見なども取り入れ、布と照明を駆使することで空間を柔軟に作るようになった。また、展示台についてもLB FURNITURE WORKS(写真28)によって捨てられていた足踏みミシンと有限会社清水銘木店に提供された栗の木や檜の木など自然の肌を生かした台が生まれた。

また、交流コーナーには再生された段ボールでできた椅子やテーブルなどが使われた。環境作りとしてヒーリングを感じさせる香の空気清浄器および加湿器がしつらえられた。同時に、白いジョーゼットの裏から光が当てられ、癒しの空間が演出された。

タイパッツがナルナセバで商品化されたので、着替え室も作ることにになり、会場の山口井筒屋に什器を借りた。

今回は3日という短い会期であることと、設営時間がそれほどないという条件だったために、舞台空間を作るような手法にて空間演出を行った(写真22・23・24・25)。

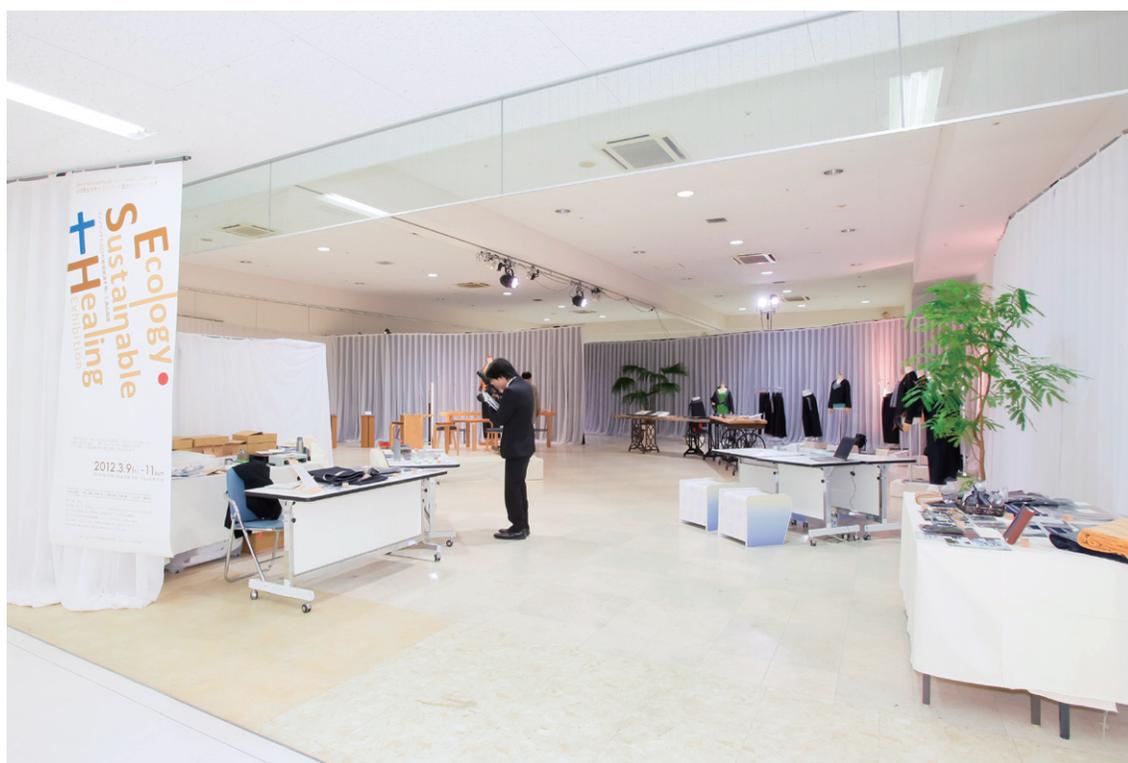


写真22 展覧会場の空間演出1



写真23 展覧会場の空間演出2



写真24 展覧会場の空間演出3



写真25 展覧会場の空間演出4



写真26 空間演出 アートディレクター：小田浩昭 (D.N.A.INC.)



写真27 装置デザイン：矢野 節 (やの舞台美術)



写真28 装置デザイン 左・右 溝内健吾・平川和明 (LB FURNITURE WORKS)

まとめ

メンバーの井生、田村、松尾そして水谷は2010年にラップランド大学に行き、ワークショップを実施し、フィンランドの人々や自然に触れ、新鮮な影響を受けた。自然が身近で生活文化を彩る要素として自然との対話や融合など、双方に似たような生活文化があることが感じられた。

また、大衆のための、シンプルで、時代を越えて使われるというタイムレスで、ロングライフのデザインが高度に発展してきているフィンランドデザインは、工業生産のためのデザインとして発展されてきた。同じデザインが半世紀以上も使われていること、また家庭でもあきのこない生活用品が長年使われている。

消費大国の日本は今、ようやく「もったいない」の精神で、古いものの再生やリサイクルなどに注目されるようになってきているが、まだまだ生活道具や衣類などを使い捨てる対象としていることから脱却できていない。

こうした現状において、フィンランドに行きまたワークショップを通じて交流することから、デザインの歴史と現代から多くを学んだ。特に、水谷は2009年～2012年まで4年間、学生をともないラップランド大学に行き、ワークショップにおいて日本の思想や生活文化をテーマにプレゼンテーションを実施し、双方の若者の創作活動を促してきた。

地域資源を用いながらも、今までに見られない新鮮なアイデアや表現が生まれている。これらはそのまま、商品化できるものではないが、ここから生まれたアイデアを地域資源のブランド化の参考にされることが望まれる。

今後の地域プロデュースを目的とするワークショップの作品のような文化芸術としての創作から産業化への道筋をさらに具体的に検討をする予定である。

地域の資源を双方に用いたワークショップを重ねることで、山口から地域の産業や団体にもよい影響を与え、地域ブランド作りに貢献していけるように、企業とのコラボレーションも継続していくことが期待される。地域ならではの方法やデザインによって、近未来におけるエコロジー、サステナブルそしてヒーリングを実現する生活文化への解答を出すために、ますますのデザイン力を磨くための研鑽を続けていきたいと考える。

すでに、共同研究のメンバーである井生や水谷は萩商工会議所が中心となって実施された萩の竹による産業化のためのフィンランドデザイナーとのコラボレーションや経済産業省中小企業庁主催の助成事業であるジャパンプランド獲得のためのプランニングなどに貢献してきた。また、山口は萩ガラスの地域ブランド化に向けたプロデュースに関わっている。さらに、水谷は柳井市の伝統工芸である柳井縞に関して柳井商工会議所の活動である中小企業庁による地域資源活用に関する助成事業のリサーチプロジェクトのメンバーとして参加し、現在もブランド化に向けた計画に関わっている。

今後さらにフィンランドデザインとの関わりを新しい地域資源ブランド化に向けた付加価値として、あるいはブランド化の手法として構築し、発展させていくことで、山口の地域にある資源のブランド化に対する方法論の提示と効果として示していくことが課題である。

注

1 水谷由美子他 「地域資源を生かした豊かな生活文化の創造をめざして - ラップランド大学と山口における地域プロデュースの実践的研究 -」 『山口県立大学学術情報』 5 山口県立大学、109-134頁。

謝辞

この場をお借りして、当展覧会実施に対してご協力およびご支援を頂きました皆様に心からお礼を申し上げたい。会場を快く提供頂き、またご支援ご協力を頂いた山口井筒屋の皆様、展覧会の空間デザインのディレクター担当小田浩昭 (D.N.A.INC.)、装置デザイン担当矢野節 (やの舞台美術) および平川和明・溝内健吾 (LB FURNITURE WORKS)、素材提供の清水勝 (有限会社清水銘木店専務取締役)、さらに商品開発とプロダクトに関してご協力を頂いた企業の皆様、商品プロデュースの担当の岡部隆則 (有限会社ナルナセバ) にお

礼申し上げたい。

また、3年間に渡る共同研究の研究者であるラップランド大学のマルヤッタ・ヘイッキラ＝ラスタス教授をはじめデザイン学部のスタッフの皆様、当研究のご理解とご支援を頂いた本学江里健輔学長・理事長をはじめ岩野雅子国際文化学部長、シャルコフ ロバート国際化推進室長他、この場でお名前を出させては頂いていないがご協力を頂いたすべての皆様にお礼申し上げたい。

